様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 31 日現在

機関番号：32660
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011 ～ 2012
課題番号：23652194
研究課題名（和文）　アイヌ－和人の民族関係史に関する文化人類学的再構築
研究課題名（英文）　The Anthropological Reconstruction concerning the History of Ethnic Relationship between the Ainu and the Wajin

研究代表者
木名瀬　高嗣（KINASE TAKASHI）
東京理科大学・工学部・講師
研究者番号：80548165

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アイヌ－和人の民族関係史について文化人類学の観点から再構築を企図したものである。そのため、言論・社会運動、アイヌ文化研究、およびメディアの表象という３つの側面から、近・現代日本においてアイヌ・和人の双方に形作られてきた自己／他者認識の相互作用を主要な焦点と位置付け、それらの歴史的な展開相について批判的に検討するとともに、こうした問題系をアイヌをめぐる〈近代〉に対する実践的アプローチへと接合するために必要な基礎的情報の整備を行った。

研究成果の概要（英文）：
This subject was planned to reconstruct the history of the ethnic relation between the Ainu and the Wajin in the perspective of cultural anthropology. It focused on the interaction between the self-/ others-understanding among the Ainu and that among the Wajin in modern Japan from three viewpoints: the social movements and the verbal practices by the Ainu, the studies concerning the Ainu culture, and the representations on the media. We investigated the historical development of them critically and prepared the basic information needed to connect such problematique with practical approaches to the modernity surrounding the Ainu.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：マイノリティー

１．研究開始当初の背景

近年アイヌをめぐっては、国会・政府によって「先住民族」としての認定がなされたこと（2008 年 6 月）や、民族最大の団体である「社団法人北海道ウタリ協会」が 38 年ぶりに「社団法人北海道アイヌ協会」へと名称復帰したこと（2009 年 4 月）など、日本社会におけるアイヌの位置付けをめぐる動向が注目される情勢にある。当然ながらこうした社会的状況は、それに対応すべき充実した研究の展開を学術界に要請しているが、アイヌをめぐる人文社会系の研究分野においては、量的な蓄積が増大したとはいえ、その内容と分野には大きな偏りが存在し続けている。とりわけ文化関連については、いわゆる「伝統」

志向の強いアプローチが従前から支配的な地位を占めており、近・現代を生きてきた人々の内面や社会的実践の動態を明らかにするような内実には依然乏しく、むしろ実態から遊離したアイヌ像の固定化に与する要素が少なくないという現状にある。

研究代表者は、こうしたアイヌ研究の趨勢を踏まえつつ、北海道におけるフィールドワークと文献資料研究とを接合した歴史人類学的な視座から、アイヌをめぐる諸言説とそれを取り巻く社会政治的状況との関連を跡づける作業を行ってきた。また、とくに本研究の連携研究者であるウィンチェスターと坂田、研究協力者である長岡の３名とは、異なるディシプリンを横断する形の私的な研究会を 2005 年から定期的に開催し、2008 年の日本文化人類学会第 42 回研究大会（於・京都大学）では「「思想としての〈アイヌ〉」へ」と題する分科会発表を行った。本研究課題はその継続的な協力関係を基礎としながら、それまでに欠けていた領域について考察対象を広げるために、新たな連携研究者（山崎）・研究協力者（喜多）を加えて立案された。

２．研究の目的

本研究は、日本におけるアイヌ－和人の民族関係史について文化人類学の立場から再構築を目指すものである。すなわち、18 世紀末の蝦夷地内国化から 21 世紀初頭の現在に至るまでのいわゆる〈近代〉の国家統合のコンテクストにおいてマイノリティ（＝アイヌ）側・マジョリティ（＝和人）側にそれぞれ構成される自己／他者認識（＝アイデンティティ）間の相互作用に主要な焦点を当て、とりわけ多様なメディアを媒介として展開してきた言葉や実践の系譜を批判的に捉え返す。それにより、アイヌと日本をめぐるアイデンティティ・ポリティクスの歴史と現在に関する重層的全体像を描き出すことに貢献するとともに、そこから得られる視座を国内外における近代性（モダニティ）に関する文化研究・歴史研究の新しい理論的潮流のなかに位置付け直すことを長期的な展望とする。その足がかりとして、そのようなアイヌをめぐる実践的研究の再検討を推し進めるために必要な情報の整備・体系化と方法論上の基礎的な枠組みの提示を行うことが、本研究の主たる目的である。

３．研究の方法

本研究は下記の３つの課題について、文献資料調査とフィールドワークの両面から基礎的情報の体系的整備を図るとともに、連携研究者および研究協力者の参加による研究会を通じて総合的な分析を行い、本課題終了後にはさらにテーマを拡大・深化させた新たな研究プロジェクトへと発展させ得る程度の内容的な厚みを蓄積する。

1）思想としての〈アイヌ〉―アイヌによる言論・社会運動史の系譜―

近・現代を通じたアイヌの著述家・知識人たちの言論や社会運動について幅広く検討し、そこに読み取られる思考と実践に関する系譜―それ自体がアイヌ－和人の民族関係史を構成する重要な要素である―を再構築して体系的に提示する。このテーマに関連した研究実績のあるマーク・ウィンチェスター（日本学術振興会 外国人特別研究員）を研究協力者とする。

2）学知としての〈アイヌ文化〉 ―口承文学研究と物質文化研究の批判的再検討―

アイヌ文化イメージの中核を成す民族誌資料として位置付けられることの多い口承文学と物質文化の研究を中心に、そこで何が読み取られ／読み落とされてきたのかについて学史的な問題点を明らかにする。口承文学研究について研究実績のある坂田美奈子（東京大学 大学院総合文化研究科 特任研究員）、および物質文化研究について研究実績のある山崎幸治（北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 准教授）を連携研究者とする。

3）メディア・表象・アイデンティティ ―テレビ・映画・文学のなかのアイヌ／北海道

テレビ番組、映画、文学作品を媒介としたアイヌ／北海道の表象についての基礎データを系譜的に整理・体系化し、1)で検討されるアイヌによる諸言説や 2)で検討される学知との相互関係について考察する。アイヌに関するテレビ番組製作にも携わりこのテーマについて知見の豊富な長岡伸一（ＮＨＫ国際放送局 チーフディレクター)、および戦後の北海道文学に関して研究実績のある喜多香織（北海道立文学館 学芸員）を研究協力者とする。

４．研究成果

〔平成 23 年度〕

1）思想としての〈アイヌ〉―アイヌによる言論・社会運動史の系譜―

木名瀬は、以前から整理を手掛けてきた作家・鳩沢佐美夫の関連資料についての精査・体系化を進め、未公刊資料の活字化作業を行うとともに、それを戦後のアイヌをめぐる言論・社会運動史のなかに位置付けて考察した。また、平取町紫雲古津のアイヌコタンで日蓮宗により 1946 年頃から行われてきた祭祀の

参与的調査を行った。ウィンチェスターは、1970 年代前半に活動した佐々木昌雄の論考について、現代思想およびアイヌをめぐる近年の政治状況という文脈の中で評価し、近代という時代における差別の役割を考える上で洞察力に富んだ視点を提供していることを明らかにした。

2）学知としての〈アイヌ文化〉 ―口承文学研究と物質文化研究の批判的再検討―

坂田は、アイヌ口承文学における頻出モチーフ・話型の調査・分析を行い、頻出モチーフ・話型が物語解釈上およびアイヌの歴史認識を理解する上で重要な観点を提起していることを明らかにした。山崎は、柳宗悦の著作群から「アイヌ」に対する眼差しを検討するとともに、北海道における民芸運動に注目し、「民芸」という思想が、現代につながるアイヌ物質文化に与えた影響について予備的調査をおこなった。

3）メディア・表象・アイデンティティ ―テレビ・映画・文学のなかのアイヌ／北海道

長岡は、戦後のＮＨＫにおいて制作・放送された代表的なアイヌ関連番組を取り上げ、その比較検討を通じて「テレビはアイヌをどう描いてきたか」を考察した。喜多は、昭和 20 年代の「北海道文学論」の言説分析を行い、「北海道」の自己表象の構成過程に見られる「北海道」とアメリカ・ヨーロッパ・アイヌとの関係性について検討した。また、３月には、作家・向井豊昭と「アイヌ文学」をめぐる論考を書き進めている著述家の岡和田晃氏を招き研究会を行った。

〔平成 24 年度〕

1）思想としての〈アイヌ〉―アイヌによる言論・社会運動史の系譜―

木名瀬は前年度に続き作家・鳩沢佐美夫関連資料の整理・体系化、とくに本年度は書簡等に基づくライフヒストリーの再検討を行った。ウィンチェスターは、思想および政治状況の中での近現代アイヌの著述家たちの言説を引き続き分析した。

2）学知としての〈アイヌ文化〉 ―口承文学研究と物質文化研究の批判的再検討―

木名瀬は 1950 年代の「アイヌ民族綜合調査」に関し学史的観点から検討。とくに社会人類学研究の中心を担った泉靖一の調査について、国立民族学博物館所蔵フィールドノートの解読に基づき再検討を行った。山崎は前年度から継続している文献調査に加え、現在活動中のアイヌ工芸家たちからの聞き取り調査を実施し、伝統工芸の現代への継承のあり方について検討した。坂田はアイヌ口承文学におけるモチーフ・話型の調査・分析を前年度に引き続いて行い、これらとアイヌの歴史認識との関連についてのケーススタディを深化させた。

3）メディア・表象・アイデンティティ ―テレビ・映画・文学のなかのアイヌ／北海道

長岡は前年度に引き続き戦後のＮＨＫにおいて制作されたアイヌ関連番組の比較検討を通じテレビのアイヌ表象についての考察を発展させた。喜多（研究協力者）は「北海道文学論」の言説分析を通じた「北海道」の自己表象の構成過程についての検討を引き続き行った。

また、上記 1)～3)に関し総合的な検討を行うための研究会を 12 月に国立民族学博物館で開催、同館で 10 月から３年半計画で開始した共同研究についての概要を齋藤玲子助教からレクチャーしてもらい、本研究との関連を検討するとともに、本研究をさらに発展的な課題に接続させるための方策について総括討論を行った。

なお、平成 23 年度末の時点では、研究代表者・連携研究者・研究協力者が分担執筆した論文集の出版を目指していたが、その後出版社との交渉を含め計画の再構築が必要となったため、成果報告集の刊行を平成 25 年度中に先行させ、それを土台とした図書の刊行を改めて期すこととなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 木名瀬高嗣 、「アイヌ民族綜合調査」と戦後のミンゾク学／アイヌ研究、『神奈川大学　国際常民文化研究機構　年報』、査読無、5 号（掲載予定）、2014 年

(2) 木名瀬高嗣 、「アイヌ民族綜合調査」とその周辺、『科学史研究』、査読有、51 巻 264 号、246-248 頁、2012 年

(3) 坂田美奈子 、トゥクピタの首長の物語―アイヌ＝エスノヒストリーを創造する、『北海道・東北史研究』、査読有、7 号、11-24 頁、2011 年

〔学会発表〕（計 6 件）

(1) 木名瀬高嗣 、「アイヌ民族綜合調査」と戦後のミンゾク学／アイヌ研究、第４回国際常民文化研究機構国際シンポジウム「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」公開研究会「ミンゾク研究の光と影―近代日本の異文化体験と学知―」、神奈川大学、2012 年 12 月 9 日

(2) 木名瀬高嗣 、「アイヌ民族綜合調査」とその周辺、日本科学史学会第 59 回年会・総会　一般シンポジウム「フィールド・サイエンスの科学史」、三重大学、2012 年 5 月 27 日

(3) 木名瀬高嗣 、〈アイヌ〉の歴史と現在、東海大学日本語文学系専題演講、東海大学

（台湾・台中市)、2012 年 3 月 19 日
(4) 山崎幸治 、アイヌ文化展示と文化人類学的課題、日本文化人類学会第 46 回研究大会、広島大学、2012 年 6 月 23 日
(5) 山崎幸治 、アイヌ物質文化資料の現代的意義とその活用、国際シンポジウム「温故知新―アイヌ文化研究の可能性を求めて―」、国立民族学博物館、2011 年 11 月 12・13 日
(6) 山崎幸治 、文化人類学的研究とアイヌ研究―北海道での実践から見えてくる課題―、日本文化人類学会第 45 回研究大会、法政大学、2011 年 6 月 12 日

〔図書〕（計 5 件）
(1) 『日高文芸　特別号』編集委員会（代表：盛義昭、編集：木名瀬高嗣 、額谷則子)、『日高文芸　特別号　鳩沢佐美夫とその時代』、札幌：４９１アヴァン、2013 年（刊行予定：総頁数未定）
(2) 山崎幸治 ・伊藤敦規（編)『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書)』、札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2012 年、337 頁
(3) Koji Yamasaki、Masaru Kato & Tesuya Amano (eds.)、teetasinrit tekrukoci-The handprints of our Ancestors. Ainu Artifacts Housed at Hokkaido University-Inherited Techniques、Sapporo: Hokkaido University Museum/Hokkaido University Center for Ainu & Indigenous Studies、2012 年、102 頁
(4) ヨーゼフ・クライナー（編)、山崎幸治 、ほか、『民族学研究』におけるアイヌ研究―終戦から昭和四〇年代まで、『近代〈日本意識〉の成立－民俗学・民族学の貢献－』東京：東京堂出版、2012 年、360-375 頁
(5) 坂田美奈子 、『アイヌ口承文学の認識論(エピステモロジー)―歴史の方法としてのアイヌ散文説話』、東京：御茶の水書房、2011 年、245 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
木名瀬　高嗣（KINASE TAKASHI）
東京理科大学・工学部・講師
研究者番号：80548165

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
坂田　美奈子（SAKATA MINAKO）
東京大学・総合文化研究科・特任研究員
研究者番号：30573109
山崎　幸治（YAMASAKI KOJI）
北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授
研究者番号：10451395

(4)研究協力者
マーク・ウィンチェスター(MARK WINCHESTER)
日本学術振興会　外国人特別研究員
研究者番号：20547583
長岡　伸一（NAGAOKA SHINICHI）
ＮＨＫ国際放送局　チーフディレクター
研究者番号：なし
喜多　香織（KITA KAORI）
北海道立文学館　学芸員
研究者番号：なし